

ヤンキーと地元——解体屋、風俗経営者、ヤミ業者になった沖縄の若者たち

凡例

- 一、インタビュー中の（ ）は、筆者による補足である。
- 二、インタビュー中の――は筆者による発言、……は中略を表す。
- 三、「」は、うちなーぐちの日本語訳である。
- 四、本書に登場する人物や会社などの名称は、すべて仮名である。
- 五、調査対象者とのやり取りの中に、差別的な表現が含まれているが、それらは調査対象者が生きる世界を反映したものであり、そのまま記録する意義に鑑みて修正は行わず、発言どおりとした。

はじめに

沖繩で出会ったヤンキーの拓哉は、「仕事ないし、沖繩嫌い、人も嫌い」と、吐き捨てるように言った。沖繩の若者が生まれ故郷を嫌いだとはつきり言うのを初めて聞いたので、私は驚いた。彼が嫌いな沖繩とはなんなのか。そもそも、彼はどんな仕事をし、どんな毎日を過ごしているのか。そうしたことを理解したいと私は思った。一〇年以上にわたる沖繩での調査の原点は、ここにあった。

この本に登場するのは、沖繩で生まれ育った若者たちだ。暴走族もいれば、建設業や風俗経営、ヤミ仕事（違法就労）に身を置く若者たちもいる。彼らは高校や大学を卒業して安定した職を得るような人生のレールに乗ってはいない。その意味で彼らは周辺的な存在と言っている。だが、裏社会を生きるような特別な存在ではない。普通の若者である。そうした彼らが、沖繩という地で、どのように生きてきたのか、生きようとしているのかを、この本では描いていく。

下世話な冗談

仲里は、沖縄の中部地区で生まれ育った三〇代の男性だ。彼と私は、話をするときの波長がよく合った。

インタビューをしている時、彼が何を言おうとしているのか、その核心を見失ったと感じることは減多になかったし、私が聞きそびれたことを彼は補ってくれた。私は参与観察をメインの調査法とする社会学者だが、インタビューが苦手で、そんな中であって仲里は、気がねなく話が聞ける数少ない相手だった。

二人とも下世話な冗談が好きで、話し始めると止まらなかった。

仲里 アメリカの男って、愛撫あんまりやらんってよ。すぐ入れるってよ。でも日本人って、愛撫するさ。おっぱい吸ったり、ていーほおー「手マン」したり。手マンコ、クンニ、ペロペーロとかするさ。

……

仲里 (TVのバラエティ番組を見ながら) これぜったい、パイパンド。きやりーばみゆばみゆ。

絶対、だーる「そっだよ」。

—— 見たらわかるんですか。

仲里 うん、剛力彩芽は、あれはぜったい剛毛やんばー「なはずよ」。

—— 名前じゃないですか（笑）。きやりーばみゆばみゆは、音の感じじゃないですか。

仲里 ばみゆパンよ。剛力彩芽、まじ、剛毛じゃないかな。

このようなどうしようもない話や、地元の人間にまつわるうわさ話、かつての武勇伝なども聞かせてもらいながら、私は調査を進めてきた。生活をともにすることで見えてくること、教えてもらうことも、調査を進める上で大事なことだと考えたためだ。

仲里と出会った二〇一二年頃、彼はマンスリーアパートに住んでいた。家賃を数カ月にわたって滞納しているようで、「そろそろ追い出される気配がする」と言っていた。彼は金遣いが荒く、常に金欠状態だった。いつもおごってもらってばかりだったが、所持金があるときは後先考えずに、参加者全員分の飲食代を出すからだ。家賃を大家に支払うために封筒に入れてベッド脇に準備していても、夜になると「金は天下のまわりものよ、パーツと飲みに行こうぜ、打越。今日は

1——社会学者には、アンケートなどを用いて量的に社会調査をする人たちと、参与観察やインタビューなどによって質的に調べる人たちがいる。後者の場合、いずれも調査場面で感じたことなど、数値化できないデータを収集する。その際、参与観察では調査地で実際に体験したことの記録を通じて、インタビューでは調査対象者に直接話を聞いた記録を通じて、こうしたデータ化を行う。両者を合わせて質的調査法と呼ぶが、体験することと話を聞くことはまるで別物で、私は話を聞くのが苦手である。

俺のおごりよ」と言い放ち、中部で一番の繁華街である中の町に向かった。私も彼におごったり、おごられたりするメンバーのひとりとして、仲里によくしてもらっていた。

「電話代がおそろしかった」

調査のために私が沖繩に滞在している八月以外にも、仲里はよく電話をかけてきた。広島にいる私に対し、近況報告から、いつもの下世話な話まで、あらゆることを話してくれた。私は私で当時離れて暮らしていた自分の家族のことを相談した。

仲里　　そういえば、(出て行った)奥さんはどうなった？

——　　実家に帰りましたよ、子どもと。

仲里　　連絡とってる？

——　　連絡は、一応とれます。

仲里　　子どもは？

——　　時々は、会ってます。

仲里　　まだいいさ、子ども会わしてくるんで、それで納得してるんだったら。

——　　いやあ、けど先月ぐらい、まあよく泣きましたねえ(笑)。

仲里　　そりゃ泣くだろ。俺も離婚して、一年くらいはうつ病みたいだった。ちょっと、ずっと

頭の中にそればかりかし、もういま（子どもは）何やってるかなー、いま何やってんのかなーって、電話代がすさまじかったからな。電話かけて、子どもに代われーって。子どもに代わっても、きりたくないさ。会いたいけど会えんさ、二時間とか、三時間とかしゃべったりして、電話代がおそろしかった。

私が家族と別居していたとき、仲里に電話すると、「打越もこれで、うちなーんちゅ（沖繩の人）、なれるさ」と励ましてくれた。離婚率の高い沖繩ならではの励みだった。仲里と仲のいい太一と慶太も一緒にいたらしく、「おまえの気持ちはわかるよ、がんばろうな」と言葉をかけてくれた。仲里と太一は離婚経験があった。彼らは妻子と離れて住むことになったけれど、そのキツさを何とか乗り越えたと、自らの経験を話してくれ、私を励ましてくれた。

あまりに日常的な暴力

二〇一二年の夏、私は仲里が住むマンスリーアパートに入り浸りながら調査をすすめていた。このアパートは彼らのたまり場で、太一も同居していた。毎日のように顔を出す私を、彼らは受け入れてくれ、なにくれとなく声をかけてくれた。

仲里 俺もあれだわけよ。俺とこの前の奥さんとの出会いってよ、奥さんが俺に惚れて、ぞっ

こんで、俺、昔あれだったわけ。マシンスロットきちがいだったわけ。

—— おーおー。

仲里 あれに恐ろしいくらいはまってしまって、で、仕事も行かんくなって、ずっとマシン屋（パチンコ店）行って、それでも（奥さんは）逃げなかったの。だから、ちょっと調子こいた部分があったわけよ。俺が何やっても逃げないわーって、仕事もやらんで、ずーっと一年とか、一年くらい続いて、奥さんに食わしてもらってる状態さ。

—— 奥さん、何してたんですか？

仲里 あれ、飲み屋（キャバクラ）。

—— （仲里に向かって）バカ野郎ですね（笑）。

仲里 バカ野郎の極みさ。下衆の極みさ。で、奥さんが働いている給料から（お金を抜いて）、スロットに行って、また。

—— これ以上ひどいことないってくらいのバカ野郎ですよ（笑）。

仲里 そう。だから、離婚するってなったときに（自分がやばいということに）気づいたわけ。

彼らはおもしろくて、人間味のある若者だった。その一方で仲里は、当時の妻が稼いだ生活資金を奪い、スロットに注ぎ込んでいた。電話で励ましてくれた太一は、妻へのDVが原因で離婚し、仲里のアパートに居候していた。慶太も、つき合っていた彼女に暴行をはたらき、罰金刑を

受けた過去があった。おもしろく、やさしい彼らは、女性たちから生活資金を奪い、暴力をふるってもいた。もちろん、そうした彼らの略奪や暴力を正当化することはできない。

彼らにとつて暴力沙汰は珍しいことではなかった。仕事の現場で何かあると先輩はすぐに後輩を殴りつけ、同じ地元グループのメンバーでも、そうしたことが頻繁にあった。こんなにも暴力が日常にあふれているのはなぜか。

それは個人の人格によっても、あるいは「男らしくあれ」という周囲からの圧力によっても、十分には説明できない。彼らとともに過ごすなかで、彼らが生きる地元社会の仕組みが深く影を落としていることを私は強く感じてきた。だから私は、後輩や女性たちに手を上げる男たちだけでなく、おもに地元つながりを通じて彼らともに生きる人々をも含めて、どのような困難に直面しているのかを知らなくてはならないと思った。その探究が本書の主題である。

*

沖繩の暴走族やヤンキーの調査を私が始めたのは二〇〇七年のことだ。その頃、ゴーパーチ（国道五八号線）にいた若者たちは、二〇一七年にはサラ金の回収業、金融屋の経営、スロットの台打ち、性風俗店の経営、ボーイ、型枠解体業、鳶、塗装、左官、彫師、バイク屋、ホスト、キャバクラ嬢、弁当屋、主婦になっていた。なかには「シヤブ中（覚せい剤中毒）」で消息不明になったり、内地の刑務所に収監された若者もいた。彼らが就いた仕事も、生活スタイルも実にさまざまだが、その大半が過酷だ。こうした中で、彼らはどのように沖繩を生き抜いてきたのだろうか。

この本には暴走族や、元暴走族が登場する。生きていくために建設業や風俗経営、ヤミ仕事に就いた若者たちが登場する。いわゆる下層の若者たちだ。一〇年近く彼らとつき合ってきた、あるいは、つき合ってもらったその記録が、この本だ。